



宮城県中学校長会

会 報



平成30年度前期の活動を振り返って

宮城県中学校長会

会 長 志小田 美 弘

平成最後の師走も残すところあとわずかとなりました。思えば平成30年という年は、酷暑と称された記録的な暑さの夏となり、そして豪雨や台風等の多くの災害に見舞われた年になりました。そのような中、各学校においては様々なリスク管理に心を配りながら、教育課程の実施に取り組んでこられたことと拝察いたします。県内各地の多くの学校では、春から生徒とともに蒔いてきた多くの学びの種が開花し、そして成長の姿に結実する姿が沢山見られたことだろうと思います。

宮城県中学校長会のこれまでの活動を振り返れば、5月末の総会で確認した「自校からの教育改革」という決意のもと、中学校長会としての結束を大事にしながらかつ課題への対応の歩みを進めてまいりました。各部の調査活動等もまとまりつつありますが、情報と認識を共有しながらそれぞれの取り組みに反映していきたいものだと考えます。

研究協議会の動きに目を転じますと、6月には第68回東北地区中学校長会研究協議会が山形市を会場に開催されました。「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」という大会主題の下、3分科会から6つの先行的な実践事例の発表があり、第1分科会においては全国大会での発表を控えた石巻地区が研究発表を行いました。最終日の山形市は、気温35度を超えんとする国内最高気温を記録する日となりましたが、多くの学びと意見の交流が図られた二日間となりました。

秋も深まった10月、栗駒山を遠望し水の里とも称される登米市において第36回宮城県中学校長会研究協議会栗原・登米大会が開催されました。石巻地区、大崎地区、大河原地区から研究発表があり、発表の後はフロアーを交えたスタイルで熱心に御協議いただきました。主管していただいた

栗原地区校長会、登米地区校長会の丁寧な計画と温かな運営に改めて感謝を申し上げます。

10月末に開催された第69回全日本中学校研究協議会鳥取（米子）大会には、本県から23名の校長先生方が参加しました。今年度の全国大会は第1分科会において、宮城県として石巻地区が「社会に開かれた教育課程」～新たな地域連携を通して～というテーマで発表してまいりました。研究協議会では、地域連携において何を身に付けたいのか、身に付けさせたい力を明確にすることが重要である等の意見が出され、活発な協議が行われました。石巻地区はもとより、この発表までに石巻地区にいただいた多くの県内の校長先生方のご意見やご助言にも改めて感謝を申し上げる次第であります。

さて、まもなく平成という元号が終わろうとしています。30年という年月は長いのか短いのか、それは様々な受け止め方があるかと思いますが、少しずつ、そして多様に変化する現代社会にあって、昭和と平成というスパンで改めて日本社会を俯瞰する時、明らかな世相の空気の違いがあることは明確に感じ取れるところだろうと思います。新しい元号がどのようなものに定まるのかは知る由もありませんが、新しい時代にも中学校教育は対応しなければならないことは自明のことです。「いじめ・不登校」、「学力向上」、そして「学校における働き方改革」や「防災教育」の取り組み……。これらは喫緊の課題であり、同時に中・長期的な視点で取り組み続けなければならない持続的な課題でもあります。

平成30年の師走。学校が抱える課題を見据えながら、平成最後の年度をまとめ、次年度計画を練っていく時期になっています。

第69回 全日本中学校長会研究協議会 鳥取(米子) 大会

研究主題：「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」

米子コンベンションセンター他 平成30年10月24日(水)～26日(金)

第69回全日本中学校長会研究協議会鳥取(米子)大会が10月24日～26日の3日間、米子コンベンションセンターを中心に米子市内の各会場で開催された。大会には、全国から2,050名の会員が参加し、「拓こう！未来の教育を 童謡のふるさと 鳥取から」を大会スローガンに、熱心な研究討議が展開された。

第1日 10月24日(水)

全日中常任理事会, 全日中理事会 他

第2日 10月25日(木)

【開会式】

山本聖志大会会長が「時代状況がスピードを上げて変化を遂げる中、近い将来今ある職業の大半がAIに取って代わる予測があり、危機感が広がっている。だからこそなお、学校教育が益々重要となり、教職員は子どもたちの未来を予見し、生涯にわたって生き抜く力を高めるため、改めて教育のもつ意義や価値について考える時が来ている。」と、新たな研究協議会主題の意義づけと活



発な研究協議への期待を込め、挨拶した。続いて、田村 穰大会実行委員長が「中学校現場においても、課題や問題は多岐にわたり、変化し続けている。校長は、学校の責任者として、しっかりとした教育理念と使命感をもち、校区の資源や強みを遺憾なく発揮し、来たるべきSociety5.0を見据え、自らの教育ビジョンの実現に向け、リーダーシップを発揮していかなければならない。」と挨拶した。

祝辞が、文部科学大臣、鳥取県知事、米子市長、鳥取県教育委員会教育長の4名からあった。

【文部科学省説明】

文部科学省大臣官房審議官下間康行氏から、①第3期教育振興基本計画②Society5.0における学びの在り方③新学習指導要領改訂の円滑な実施④学校における働き方改革の推進⑤いじめ・不登校

対策⑥教師の資質向上を中心に説明があった。

【全体協議会】

〈第1研究協議題：全日中提案〉

全日中生徒指導部長笛木啓介氏から、「全日中教育ビジョンに基づく『学校からの教育改革』と題し、全国アンケートの結果から、特に特別支援教育に関する課題そして改善の方向性について提案がなされた。

〈第2研究協議題：地区提案〉

大分県小中一貫校蒲江翔南学園の甲斐徳人氏から「蒲江とともに歩む学園」づくりを目指して～児童生徒の成長に資する小中一貫校としての取組をとおして～」と題し、保護者や地域の方々と手を携え、教職員が協力して教育活動を推進することの重要性について提案された。

【分科会】

8つの分科会に分かれて、発表、研究討議が行われた。

第3日 10月26日(金)

【全体会】

大会実行委員長より「大会宣言(案)・決議(案)」が提案され、承認された。

【記念講演】

鳥取県出身で、株式会社モンベル会長／米子・大山観光大使／登山家・冒険家である辰野 勇氏による「夢と冒険 ～今リーダーに求められる力～」と題する講演が行われた。冒険家として自身の生き様から、生きる力として必要なものは「集中力」「持続力」「判断力」であり、これらに加えてリーダーに求められるものは「決断力」であること。震災の支援や「モンベルチャレンジアワード」「アウトドアスポーツ 7つのミッション」等で成功を収めるには、「知恵」「勇気」「やる気」がどれだけもてるかが鍵になる等、とても機知に富んだ講演であった。

【閉会式】

大会会長と大会実行委員長の御礼の挨拶に続き、次期開催地である群馬県の三浦会長が、「上毛カルタ」にならって群馬の紹介と挨拶をされた。最後に群馬県の校長先生方が来年度の参加をアピールし、3日間の大会が終了した。

(大崎市立古川東中学校長 玉水 透)

第1分科会に参加して

「社会に開かれた 教育課程の編成・実施」

記録：石巻市立稲井中学校長 菊地 正明

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 社会に開かれた教育課程の編成・実施
新たな地域連携の構築をとおして、社会に開かれた教育課程の編成・実施の取組
(宮城県)
- (2) 社会に開かれた教育課程の編成・実施
学校や地域の特色を生かした教育課程の編成・実施の取組
(福島県)

2 実践の概要

- (1) 実践の概要（石巻地区校長会）
 - ・震災以降の石巻地区の現状を踏まえた上で、研究の視点を明確にした取組であり、学校と地域との新たな連携（双方向連携）へ発展させた研究実践であった。
- (2) 実践の概要（三和中学校・田人中学校）
 - ・三和地区と田人地区それぞれの地域の特色を教育課程に生かし、新たな地域連携の仕組みを構築した研究実践であった。

3 研究協議

- ・子どもたちに育成すべき資質・能力を具体的にかつ明確にして取り組むことが必要だ。
- ・地域を好きになり、地域の未来を担い、世界で活躍できるそんな力を身に付けさせたい。
- ・勤務時間外の実践など教職員や生徒の過重負担にならない配慮が必要だ。

4 全日中からの指導助言

- ・全日中教育ビジョン改訂版の教育課程の創意工夫の方向性に沿った取組であり、また提言9「学校と家庭・地域社会」の趣旨にも沿った取組で社会に開かれた教育課程の重要性を明らかにした研究実践であった。東日本大震災以降の大きな変化の中で、学校と地域・家庭等との連携を教育課程の編成・実施の中で効果的に進めている貴重な発表であった。
- ・各活動において、当初の目的を失わぬよう「どんな力」を生徒に身に付けさせたいのかを常に明確にしておく必要がある。

第2分科会に参加して

「主体的・対話的で深い学び」の実現

記録：白石市立東中学校長 永山 晋

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 地区内の各校がそれぞれの学校の特色を生かしながら「確かな学力」の定着と向上のため、思考力・判断力・表現力の向上を目指した実践
(栃木県)
- (2) 組織を構成する教員を、状況を判断し、自分で考え、方向性の正しい指導や支援ができる教員に育てる実践
(群馬県)

2 実践の概要

- (1) 栃木県真岡市立大内中学校の実践
 - ① 朝自習の時間の再構築(学習意欲の向上)
 - ② 自主学習コンクール(家庭学習の改善)
 - ③ 学習の決まり7か条(授業意識の改善)
 - ④ ノーメディアデー(遺校種間の連携)
- (2) 群馬県榛東村立榛東中学校の実践
 - ① 授業改革コーディネーターの活用
 - ② 授業改革委員会の活用
 - ③ テーマ設定による授業研究の実践
 - ④ 教科の枠を超えた授業研究の実践

3 全日中からの指導助言

栃木県の発表は「主体的な学び」を中心に捉え、「学びに向かう集団づくり」や「子供が意欲的に取り組む授業づくり」に取り組んでいる。教員集団の意識改革や同僚性を高めた授業改善や学習規律の向上、家庭生活にも配慮した学習習慣の形成など、学力向上に向けた取組である。

群馬県の発表は課題達成のために確固たる教師力育成を目指した実践である。「授業改革」の経営方針、授業の見取りの5点の提示、学力向上委員会の校時表への組み入れ、全校一斉の道徳の時間の設定など、信頼される学校づくりに校長の思いがよく感じられる取組である。

両発表ともに、全日中ビジョン提言1「確かな学力」の趣旨に沿った内容で「学習意欲の向上により、確かな学力の伸長」を明らかにし、校長のリーダーシップの下、全教職員が組織的に取り組んだ発表であった。

第3分科会に参加して

「より良く生きようとする意思や能力を育む
道徳教育の充実」

記録：川崎町立川崎中学校長 庄司 毅

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 人間としての在り方や生き方を求める道徳科の指導の充実を目指して (島根県)
- (2) カリキュラム・マネジメントの視点から (山口県)

2 実践の概要・内容

- (1) 島根県の実践
 - ① 時数の確保 (年間35時間の確実な実施)
 - ② 指導方法の工夫 (RP, ローテーションTT, ペア・グループ, 発問の工夫)
 - ③ 行事等体験的な活動との関わり
ふるさとに根ざした道徳教育事業 等
 - ④ 道徳科にむけた評価の試行
励ます内容を具体的に記述
- (2) 山口県の実践 (部会ごとの取組)
 - ① 道徳の目標や計画に関する研究部会
 - ② 指導体制等に関する研究部会
 - ③ 授業に関する研究部会
 - ④ 評価に関する研究部会

3 全日中からの指導助言

島根県の発表は、校長の強いリーダーシップの下、「考え、議論する道徳」への質的転換に向けた実践である。山口県の発表は、カリキュラム・マネジメントの視点から校長会として、道徳教育の充実に向けて組織的に取り組んだ実践である。

2つの発表は、「特別の教科・道徳」の実施に向け、全日中教育ビジョン三改訂版の提言3「道徳教育」の趣旨に沿った取組で、より良く生きようとする意思や能力を育む道徳教育充実の重要性を明らかにした研究実践である。そして、校長の強いリーダーシップと教職員を生かすマネジメント力が発揮され、大変参考になる発表であった。

第4分科会に参加して

「体力の向上と生涯にわたって
運動に親しむ資質・能力を育てる教育の充実」

記録：栗原市立高清水中学校長 阿部 勇志

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 体力向上や健康の保持増進を図る体育・スポーツ活動の充実を目指して (北海道)
- (2) 組織的・計画的に体力向上や心身の健康の保持増進を図る教育活動の工夫・改善 (北海道)

2 実践の概要

- (1) 北海道の実践①
 - ・授業実践改善を通じ、指導の充実に向けた専門家による授業参観及び研修の実施
 - ・指導方法の検討後、指導方針の策定
 - ・新体力テストの結果を踏まえた自己課題の把握
 - ・共同研究によるマネジメント意識の向上
 - ・教職員の協働意識の向上に向けた取組
- (2) 北海道の実践②
 - ・運動や健康に関する課題の明確化
 - ・体力向上に関する意識調査
 - ・体力向上等の実践交流
 - ・校内研修における体力向上策の見直し
 - ・アウトリーチ事業の活用
 - ・保健体育科のシラバス改善
 - ・体力向上プランの作成

3 全日中からの指導助言

全日本教育ビジョン(改訂版)の健全育成の推進に沿った取組であり、提言2「健全育成」学校・家庭・地域社会の責任分担と連携強化に合致した内容である。「生涯にわたって運動に親しむための教育活動の重要性」を明らかにした研究実践であり、個々の校長の強いリーダーシップと校長会という組織力を生かした内容である。



第5分科会に参加して**「未来を切り拓くための
キャリア教育の視点に立った進路指導の充実」**

記録：亘理町立亘理中学校長 奥野 光正

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 地域とともに取り組むキャリア教育「チャレンジウィーク勤労体験学習」をきっかけに
(滋賀県)

社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するキャリア教育の取組

- (2) 体験活動を柱にした学校教育活動全体を通じた計画的な進路指導の充実 (大阪府)
学校教育活動全体を通じた体系的・系統的な進路指導の取組

2 実践の概要

- (1) 滋賀県竜王町立竜王中学校の実践

兵庫県で始まった「トライやる・ウィーク事業」をモデルに、中学2年生対象の勤労体験学習を、5年間で2日間から5日間に延長し実践している取組である。求人票、面接試験、辞令交付式など生徒の主体的な取組を促す工夫が随所に見られる。

- (2) 大阪府熊取町立熊取南中学校の実践

里山体験学習や職場体験学習、保育体験学習や人権集中学習、そして小中連携体験授業等、地域の教育力を生かし教育活動全体を通じて取り組んでいる進路指導の実践である。校長のもつ人脈を活用した地域人材に学ぶ学習会も展開している。

3 全日中からの指導助言

二つの発表とも、学級会活動を要に、教育活動全体を通じて行われていること、自己の将来や社会づくりにつながることを念頭に置かれていること、小から高へのつながりが考慮されていること、職場体験だけでなく自己実現に向けて努力していく力を培う取組であることなど、新学習指導要領に示されたポイントをよく押さえた実践である。

望ましい勤労観、職業観、自分の良さを知り人との関わりを大切に、希望をもって働き、生きること具体的な魅力を感じさせることができる教育活動を模索している学校にとって、新たな意欲と方策のヒントとなる。

第6分科会に参加して**「自他の生命を尊重し
自己有用感を育む生徒指導の充実」**

記録：多賀城市立東豊中学校長 相澤 祐太

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 家庭や地域社会及び関係機関、専門家等との連携・協力を密にした生徒指導の推進
学校・家庭・地域が一体となった諸塚村の「ふれあい教育」の実際 (宮崎県)

- (2) 自他の生命を尊重し自己有用感を育む生徒指導の充実
S・O・S (スモール・ワン・ステップ) の可視化を目指して (鹿児島県)

2 実践の概要

- (1) 宮崎県諸塚村立諸塚中学校の実践

- ① 「諸塚」の「も」のM学習
「ふれあい教育」の精神を理念とした、学力向上、指導力向上を目指した学習
- ② コミュニティのC学習
地域間連携、ふるさと諸塚を再認識することをねらいとした「絆」づくり学習
- ③ ふれあいの「あい」とふるさとを愛する「愛」のI学習

幼・小・中の12年間の段階的な教育と発達性を加味した継続性の一貫教育

- (2) 鹿児島県湧水町立栗野中学校の実践

- ① 豊かな心と健やかな体を育む教育の可視化
・生徒の「自己有用感」を醸成するために「S・O・S」を合言葉に、少しずつ、一つずつ、一歩ずつ「豊かな心の貯金」につながる体験活動
- ② 学校運営と生徒指導の関連性の可視化
・鹿児島県総合教育センター「学校楽しいーと」と学校独自のアンケートにより学校適応感の変容を可視化

3 全日中からの指導助言

「自己有用感」は、自己に対する肯定的な評価であり、社会性の基礎となるものである。両校とも、このことを根底におき、地域、生徒の実態、課題等を踏まえ、校長が抱く学校経営のビジョンの「生徒指導」のあり方を具現化した大変参考になる実践である。

第7分科会に参加して

「多様化・複雑化した学校教育課題に
対応できる教員の育成」

記録：気仙沼市立階上中学校長 菅原 定志

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 「ビジョンを共有し教職員の資質向上を目指す校長としての取組」と題した研究。校長として、人材育成のあり方を10の視点で提案した。(香川県)
- (2) 「『別子中学校学び創生事業』への取組を通して」と題した研究。過小規模校の存続のための、「チーム別子」としての道標と戦略について提案した。(愛媛県)

2 実践の概要

- (1) 香川県丸亀市立南中学校の実践
人材育成のあり方として、「ビジョンの共有」「課題のとらえ方」「目標面談」「校長室を開く」「組織を生かす」「強化月間の設置とボランティア組織の活用」「研究会を通して」「学校・地域との連携」「学校だより、職員研修の配布」「自己評価 校長評価」の10の視点で実践している。
- (2) 愛媛県新居浜市立南中学校の実践
「別子中学校学び創生事業」を成功させるために、「チーム別子」の道標と戦略として、「事業のねらいの周知徹底と自己有用感」「英語・数学・理科を重視した教育課程の編成」「マスコミを巻き込んだPR」「別子モデルの構築」「有力な協力者＝教頭によるサポート」「一人一人を大切にした授業のために」「目標管理制度の有効活用」を実施している。

3 全日中からの指導助言

2つの発表は、全日中教育ビジョン改訂版の人材育成の改善の方向性に沿った取組、また、提言1「確かな学力」の趣旨にも沿った取組で、「多様化・複雑化した学校教育課題に対応できる教員の育成」の重要性を明らかにした研究実践である。そして、校長の強いリーダーシップと教職員を生かすマネジメント力が発揮され、大変参考になった発表であった。

第8分科会に参加して

「地域との連携・協働による
『チーム学校の創生』」

記録：七ヶ浜町立七ヶ浜中学校長 佐藤 剛

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 校長の指導性を発揮する3つの場面より」と題した研究。研究の3視点について校長の指導性を提案した。(岐阜県)
- (2) 「小中一貫教育の推進を通じた地域との連携体制の構築」と題した研究。平成16年度から小中連携の可能性を模索し、実践を元に小中一貫教育について提案した。(愛知県)

2 実践の概要

- (1) 岐阜県・飛騨地区の実践
研究視点1「教職員の専門性を高め、組織力を高める」については、異校種間連携、校区の事業主との連携。研究視点2「外部人材との効果的な協働体制」については、地域課題に主体的に取り組む生徒育成、多面的・多角的に地域を捉える生徒の思考力育成。研究視点3「学校と地域体制の構築」については、コミュニティスクールといったチーム学校を意識した実践をしている。
- (2) 愛知県・豊橋地区の実践
施設隣接型小中一貫教育については、目指す生徒像を地域全体で共有化しながら、地域と学校のつながりを重視する取組。施設分離型小中一貫教育では、PTA推進委員会での話し合いを通して、共通の学校行事を実践している。

3 全日中から指導助言

岐阜県の発表は、校長の願いを教職員や地域と共有し、それに対応した組織の構築と見届けの必要性を示した。愛知県の発表は、小中一貫教育推進のためには、地域との連携の必要性を示している。二つの研究実践は、チーム学校として外部と積極的に関わりながら開かれた環境になっていくための校長としてのあり方について大変示唆に富んだ研究である。

第36回 宮城県中学校長会研究協議会 栗原・登米大会

去る10月12日、登米市登米祝祭劇場 水の里ホールにおいて、大会主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」の下、第36回宮城県中学校長会研究協議会栗原・登米大会が開催されました。



開会行事は菊地正美大会実行委員長の開会宣言の後、志小田美弘宮城県中学校長会会長が挨拶を行いました。

まず、西日本を中心に被害の大きかった7月豪雨に対する本会からの義援金に対して、広島県、愛媛県の校長会から御礼があったことと、岡山県校長会からの御礼の手紙を紹介しました。そして「社会の大きな変化の中で教育改革が叫ばれています。我々は、大きな変化の中で校長として仕事をしているというのを感じます。ややもすれば、変化に対して受け身になりがちなのは凡人の常ではありますが、「不易」というものは、何かを考えながら、自校から教育改革として主体的に対応していくことを求めているのだらうと思います。加えて大事なことは、対応することをもって終点にしないことだらうと考えます。「考え、議論する道徳」というフレーズが登場していますが、真に大事なことはあるべき姿を皆で「考え、議論する」ことだらうと思います。今日の研究協議会がそのような場の端緒となることを願います。」と述べました。

記念講演では、小野寺文晃大会副実行委員長が講師紹介を行い、「伊豆沼・内沼の自然と保全」と題し、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団総括研究員嶋田哲郎氏より講演をいただきました。

まず、冒頭スライドのマガンの飛び立ちシーン

を挙げ、10羽または100羽単位でくくりながら数えるという話から入りました。伊豆沼、内沼は荒川という川の一部であり、迫川、北上川を通じて海とつながり、サケやウナギも伊豆沼で確認できます。河口から60kmも上流でありながら、標高6mのとても低い地域で、最深部が1.6mしかないとても浅い沼です。この地形的な特徴が、ハスの群生をはじめとする生物の生育を決定しています。マガンは大集団をつくって行動します。マガンの群れの日の出の飛び立ちは一見の価値があります。日中は落ち糞を食べています。圃場整備が進みコンバインが入ると落ち糞がたくさん出て、宮城に飛来する数は全国の9割を占めるほど。マガンは農家とうまく折り合って生きています。

豊かな食料の他に伊豆沼は凍りにくい水辺の北限で、水辺は安全なねぐらになっています。食と住がそろっているのでたくさん飛来してきます。水生植物や魚類の生態、人の暮らしや外来生物への対策を話した後で、生物の存在を互いに認め合うことは生物多様性につながり、伊豆沼のような豊かな生態系を育みます。人間社会にあてはめると、いろいろな人間がいてよいのだ、ということの研究から学ぶことができると、まとめられました。



閉会行事では海原孝大会副会長がご講演への御礼を述べ、次期開催地の本吉地区について、学校や地域における震災からの復興状況、新たに地域の希望となる気仙沼大島大橋と三陸道、さらに地域の産品・観光を紹介しながら、感謝とおもてなしの気持ちでお迎えしたいという言葉で締めくくりました。

(石巻市立桃生中学校長 西條 裕哉)

研究題 「社会に開かれた教育課程の編成・実施」(石巻地区)

第1分科会に参加して

白石市立小原中学校長 成瀬 啓

1 はじめに

第1分科会では、研究題を受け、「社会に開かれた教育課程の編成・実践」～新たな地域連携を通して～を研究テーマに掲げて取り組んだ石巻中学校長会からの発表と研究協議が行われた。

2 研究発表

(1) 研究のねらい

教育課程を開くことによって、学校教育と地域との有効な関わりを得られることが期待できる。校長として地域のコミュニティの現状を考慮し、学校経営の視点を踏まえた上で新たな地域連携を構築することにより、宮城県の教育が目指す姿につながる。

(2) 研究の視点

【視点1】みやぎ志教育

【視点2】地域貢献

【視点3】防災教育

【視点4】コミュニティ・スクール

(3) 研究の内容

①実践例1「みやぎの志教育」視点1

○取組の概要

- ・小学校行事への協力、地域行事への参加。
- ・「高校生の話を聞く会」の実施。

○成果と課題

- ・地域との関わりが生徒の意欲に結びついた。
- ・地域からの評価により、自己有用感を得ることができた。
- ・進路情報を集め、目標を達成しようと努力する生徒が増えた。
- ・地域への発信や活動機会の拡大が必要。
- ・コーディネーターの育成が必要。

②実践例2「地域貢献」視点2

○取組の概要

- ・小学校の行事や諸活動に中学生を派遣。
- ・地域のイベントに吹奏楽部が演奏を披露。
- ・保・小・中、地域との合同避難訓練の実施。
- ・市の防災訓練にボランティアとして参加。

○成果と課題

- ・「出番と役割」が生まれ、復興や地域作りに貢献したという自信をもつことができた。
- ・「協働教育協議会」の結成により、学校を取り巻く人々の協働の仕組みが生まれた。

- ・学校・家庭・地域の協働による地域貢献活動をさらに推進していく必要がある。

③実践例3「防災教育」視点3

○取組の概要

- ・防災マップの作成と、新入生への説明活動。
- ・「復興プロジェクト」との連携による活動。
- ・地域防災訓練への参加。

○成果と課題

- ・各活動を教育課程に位置づけることができた。
- ・学校と地域の役割が明確になった。
- ・「開かれた教育課程」「地域連携」「防災への意識」についての地域差が顕在化した。

④実践例4「コミュニティ・スクール」視点4

○取組の概要

- ・地域産業体験の実施。(漁業体験)
- ・地域のお祭り等への積極的参加。

○成果と課題

- ・地域からの評価による、自己有用感の醸成。
- ・地域とのつながりの実感。
- ・地域の人的・物的資源の掘り起こしと連携。
- ・学校運営協議会による役割の分担必要。

3 研究協議

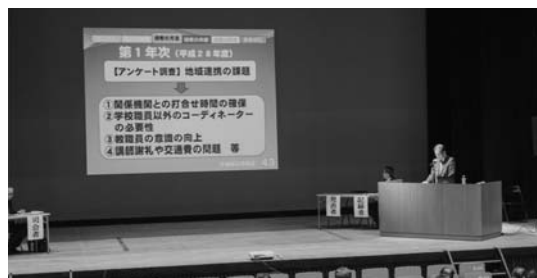
本発表を聞いた上で、以下の2つのテーマについて、3～4名程度のグループに分かれて活発な意見交換が行われた。

①これからの地域連携を進める上での校長の役割

②地域と連携した防災教育を進める上での校長の役割

4. おわりに

3年間の研究に取り組まれた石巻地区校長会の研究発表を拝聴できたこと、また研究協議において、地域連携や防災教育の取組について多くの実践例を聞くと共に、校長としての役割を考えることができたこと、非常に有意義な分科会であった。今後の学校経営に生かしていきたい。



研究題 確かな学力の育成を目指す学校経営
 - 「学力向上に向けた5つの提言」の実践の充実を通して - (大崎地区)

第2分科会に参加して

涌谷町立涌谷中学校長 新井 雅 行

1 はじめに

第2分科会では、大崎地区校長会から「確かな学力の育成を目指す学校経営-『学力向上に向けた5つの提言』の実践の充実を通して-」と題して研究発表があり、質疑・応答やグループでの情報交換で研修を深めた。

2 話題提供の概要

(1) 研究の概要

大崎地区では、「学力向上に向けた5つの提言」の実践の充実を図り、確かな学力を育成する学校経営の在り方を明らかにするため、下記の3つを手立てとして実践を行った。

- 1 「5つの提言」の「理解」をさらに深め実践する。
- 2 「5つの提言」をあらゆる場面で着実に「継続」する。
- 3 「5つの提言」を事項の良さと課題を踏まえて「自校化」を図る。

(2) 研究の実践

手立てに基づく実践事例の紹介があった。

【手立て1に関する実践事例】

「5つの提言」の一つ一つの意味を再確認するために、穴埋めのワークシートを使用したりグループワークを取り入れたりした研修を行った。また、提言が学力向上に結び付く根拠や理由を職員に説明した。

【手立て2に関する実践事例①】

提言1・2を重点を置き、学校生活のあらゆる場面で継続・実践するよう職員会議等で再確認した。その際、中学生の発達の段階を踏まえ、その生徒に適した声の掛け方、褒め方をしよう努めた。

【手立て2に関する実践事例②】

ノートづくりコンテストを定期的を実施し、ノートづくりの習慣化を促した。ノートづくりの目安となる「手引書」を作成・配布し、指導を徹底した。

【手立て2に関する実践事例③】

小・中学校連携事業として「メディア・コントロール週間」を設定した。

【手立て3に関する実践事例①】

ノートの書き方として、具体的に3つの段階、3つのスペースの必要性を指示した。

【手立て3に関する実践事例②】

家庭学習の時間を確保するために、下記の6点を毎日、全校で行うよう統一した。

- ・5教科のドリル・音読・漢字練習
- ・英語プリント・計算ドリル・自主学习1ページ

<校長として意識した働き掛け>

校長として意識した働き掛けについて、それぞれの事例で細かい違いはあるものの、大きく以下のような報告があった。

- ・生徒への声掛け、校内研修の講師、模擬授業の授業提供など、校長が率先して提言の実践に取り組んだ。
- ・職員会議や校長通信等により、5つの提言について職員の理解を深めた。
- ・学区内の幼保小中の連携を図った。
- ・校長が生徒や保護者宛に手紙を書いたり、学習プラン表の集計を行ったり、職員の実践をサポートした。
- ・提言の充実に向けて、必要となる活動を実践する際に、直接担当となる職員に指示し、全校に周知を図るとともに、実践状況を確認した。
- ・家庭学習の時間の確保等は、保護者に対して説明し、理解を求めながら協力体制をつくった。

3 おわりに

参観者からは、「ノートづくりの手引き書」、「家庭学習について保護者への働き掛け」について質問があり、研修を深めることができた。また、「理解」「継続」「自校化」について、提言4,5を中心に4人グループに分かれ、活発な情報交換が行われ、研究発表の内容とあわせ各校の取組を知ることができ大変参考になった。今後の学校経営に生かしていきたい。



研究題 「自他の生命を尊重し自己有用感を育む生徒指導の充実」

第3分科会に参加して

気仙沼市立松岩中学校長 千葉 幹 雄

1 はじめに

第3分科会では、大河原地区校長会から「自他の生命を尊重し自己有用感を育む生徒指導の充実 ～不登校問題とその対応～」と題して研究発表があり、質疑・応答や不登校問題についてグループ協議を行い、研修を深めた。

2 研究発表

(1) 研究の概要

大河原事務所管内では、平成28年度から3ヶ年、以下の研究実践に取り組んだ。

- ・学校が抱える不登校問題に関する状況調査を行い実態の把握に努めた。
- ・参考となる対策例を各校で実践した。
- ・不登校問題に関する講演会を実施し、学校経営及び研究の参考とした。
- ・関係機関との連携について把握し、実践事例の収集を行った。
- ・不登校未然防止について取組事例の収集を行った。
- ・不登校に関する情報を共有し学校経営に生かした。

(2) 研究の実践

①「不登校問題」への取組に関するアンケートの実施

不登校生徒への対応、再登校への取組、未然防止について調査を行い、不登校問題の解決に生かす。

②関係機関との実践事例

心のケアハウス事業について、大河原町と白石市の連携事例が紹介された。

○大河原町

学校と心のケアハウスが連携し、ケース会議を行い支援の方向性を確認する。ケアハウス独自の家庭訪問や学習支援を通して不登校改善の可能性が広がった。

○白石市

心のケアハウスのS V 2名（退職校長・

教頭）とSSW2名が関係機関との連携調整を図るとともに、学校を訪問し対応に悩む職員の相談に応じ、方向性を提案する。

③不登校未然防止の取組事例

協同学習を取り入れた授業づくりや縦割り班の清掃、地域の方々とのふれあいを通して、自己有用感の育成を図った取組が紹介された。

他者とのかかわりの中で自己有用感を育成していくことの重要性を再確認した。

(3) 成果と課題

成果については、専門機関との連携やチーム学校としての取組によって、学校・担任の負担軽減につながったことなどが報告された。

課題については、家庭環境の複雑化と、専門機関との連携を今後も継続して行えるか不透明で、学校としてどのような専門機関と連携していくかの確かな選択が今後迫られることなどが報告された。

3 グループ協議

3～4名のグループに分かれ、不登校問題に関する各校の状況や取組について活発な情報交換が行われた。

4 おわりに

大河原地区では、関係機関（心のケアハウス）との連携と未然防止の取組を2本柱として、不登校問題に取り組んできた。質疑応答においても心のケアハウスとのかかわりについて取り上げられ大変興味深く参考になった。

